

実践女子学園 創立120周年記念 公開講座

「伝統と現在」実践女子学園120周年 国文学科100周年記念

実践女子大学 京都学 特別講座

「京都をめぐる文学」

2019.
2.23
[sat]



司会： 棚田 輝嘉
(実践女子大学
文学部 国文学科 教授)

本学園の創立120周年、また国文学科100周年にあたる今年、開催された公開講座。京都市が展開する「京あるき in 東京 2019」との提携講座としても位置付けられ、「京都」という切り口から、梶井基次郎の『檸檬』や、宮沢賢治の創作などについて本学教員が講演を行いました。また会場では、京都市職員による「京あるき」「京都創成」の取組み紹介なども行われました。

講演 梶井基次郎『檸檬』の京都

1980年代以降、中学国語の教科書でも取り上げられ、多くの人にとって身近な文学作品である『檸檬』。作品が書かれた時代の地図や、モニターに映したストリートビューによる現地の状況を資料に、「実際にその場にいるような気持ちになって作品を考察する」興味深い試みが行われました。

■舞台としての「京都」に着目して作品を読む

梶井基次郎の『檸檬』は、第三高等学校の生徒だった作者の学生生活を題材に書かれた文学作品です。あらずじは、「えたいの知れない不吉な塊」に心を押しえつけられている「私」が京都の街を浮浪し、丸善で画集を積み上げそこに檸檬を置いて、それを黄金色の爆弾だと妄想しながらその場を離れ京極通りを下っていく、というものです。

文学研究の分野の一つに、作品の舞台と作品世界とがどのように関わっているかを考察する「都市論」という分野があります。私はこの都市論の存在を知ってから、『檸檬』は京都という舞台との関わりから見ていくと非常に面白い作品だと考えるようになりました。京都は平安京以来、碁盤の目のような路地で区画整備されてつくられています。街の構造が非常にわかりやすく、特に作品が書かれた大正時代は建築技術に限られていたため通りに面して町屋がずっと建ち並び、北を向いているのか南を向いているのかさえ分からなくなるといった感覚をもたらしたのではないかと思います。街歩きから得られる感覚も、他の都市では得られない、独特のものであったのではないのでしょうか。目印が何もないので、今自分がどこにいるのかを周囲の山の景色を見ながら把握しなければならない。歩きながら、自分の身体が今どこにあるかを強く意識させられる、身体との対話が求められるような側面があります。『檸檬』の主人公は病んでおり、重苦しい身体を引きずり、街歩きの中で自分の気持ちを変えるような感覚を味わいたいと願いながら散歩しています。それを叶えてくれるのが京都の街割りだと考えます。病んでおり借金もある、それを認めたくない気持ちが、自分は今京都にいないのだという想像に彼を駆り立てます。作品最後の、主人公が京極の街を下っていくシーンも、視覚化するととても象徴的です。歓楽街で色とりどりの活動写真の看板が立ち並び中を病んだ彼が立ち去って



講師：河野 龍也
(実践女子大学
文学部 国文学科 教授)



▲本学が所蔵する、梶井基次郎直筆の『瀬山の話』草稿も提示されました。

く。その様子は、丸善の、積み重ねられた画集の上に檸檬が置かれた光景に重ね合わされています。

■地図をたどりながら主人公の心情を想像する

『檸檬』は、梶井の死後発見されその友人・淀野隆三が『瀬山の話』と仮題をつけた作品から梶井自身によって切り出され、推敲を経て完成したものだと考えられます。『瀬山の話』の原稿を見ると、この作品は当初、分身小説として構想されていたことがわかります。しかし、第二挿話の中で主人公が自身の名前を叫ぶエピソードを盛り込むことで、分身小説という構想をあきらめざるを得なくなりました。

この『瀬山の話』も京都という土地との関わりが強い作品です。クライマックスにあたる第二挿話「私のお母様」の章を見てみましょう。作品の中に、主人公の下宿が当時あった場所として白川という地名が出てきます。京都の街中から白川に至る道は田んぼの中の淋しい一本道で、『檸檬』の舞台とは対照的な世界が広がっています。下宿に向かって歩きながら、主人公は自分を可哀想に思います。そして急に母を思い出し、自分を理解し見捨てずにいてくれるのは母だけだと思います。この道を歩いてなぜそんなことを考えるのか。当時の地図や、Googleが提供しているストリートビューで現在の該当地の様子を見ると、いろいろなことがわかってきます。作品の中に「星と水車と地藏堂と水の音の中を歩み秘めていた」という描写が出てきます。当時の地図にこの地藏堂にあたるものは表記されていませんが、ストリートビューで見ると御堂があり、そこに母子の守り神である子安地藏があることがわかります。「白川」と具体的な地名が出されているため、京都の人ならこれを読めば「あの地藏堂の前を歩いて子安地藏を目にし、母親を思い出したのだ」とわかるのだと思います。

『檸檬』は、郊外の下宿ですさんだ生活を送る主人公が、都会の人ごみに紛れることで自分ではない自分になるという、郊外と都会との対比がなされている物語です。分身小説につながっていく構想があったものの、それが破綻してこの箇所だけを独立させた結果、碁盤の目のように区画整備された街中で自分の居場所を見失うという物語に組み上げられた、つまり切り捨てることで純粋化された作品ができあがったのだと見えてきます。

このように、地図を見ながら文学作品を読むというのは大変楽しいものです。作品が生まれた時代の地図と照らし合わせたり、ストリートビューを利用しながら読んでいくと、いろいろな発見があるということをお伝えしたいと思います。



▲『檸檬』が書かれた1921(大正10)年頃の京都の地図を資料として使用。来場者にも配布されました。

講演 宮沢賢治の京都・一班一敏、涙骨、政次郎とともに

岩手県花巻市生まれ、生涯の多くを岩手で過ごした宮沢賢治にも、京都とのゆかりがありました。賢治とその作品世界について長年追究してきた講師が、賢治と京都、また京都がつなぐさまざまな人と賢治との関わりを解き明かし、京都という土地がもつ奥深さを浮き彫りにしました。

■父・政次郎との関西旅行で 京都を訪れた賢治

史料研究によると、宮沢賢治はその生涯で二度、京都を訪れています。一度目は1916（大正5）年3月1日出発の、盛岡高等農林学校での修学旅行。東京で西ヶ原農事試験場や駒場農科大学見学などを行った後、3月23日に京都駅に到着。府立農林学校や農事試験場などを見学する一方、東西本願寺、嵐山、金閣寺、北野神社なども訪れ、奈良や大阪にも足を伸ばしました。二度目は1921（大正10）年4月初旬の、父・政次郎との関西旅行です。実家が信仰していた浄土真宗に飽き足らなくなつて法華経を信仰するようになっていた賢治は、浄土真宗を信仰する政次郎と口論を重ねた結果、その年の1月に家出して上京していました。家業の古着屋を継いでいた政次郎は仕入れのために東京や関西をしばしば訪れていましたが、4月初旬に上京して賢治の滞在先を訪ね、比叡山伝教大師1100年遠忌や叡福寺聖徳太子1300年遠忌参詣を目的とする関西旅行をすすめ、賢治も同行することになりました。史料によると、賢治は政次郎とともに伊勢参りや比叡山参詣等を行った後、京都に入り、政次郎の愛読紙であった宗教紙「中外地報」を発行する中外地報社を訪れ、旅の目的の一つである叡福寺への道をたずねました。その後すぐに向かったものの交通の複雑さや不便さのため断念し、法隆寺で参拝を行いました。翌日、奈良駅から東京に戻ります。この間、「伊勢」12首や「比叡」12首などの短歌を残しています。

宮沢賢治と京都について、伝記的な事実は上記がほぼすべてと考えられます。しかし、考察を要する事柄として、政次郎・賢治親子の関西旅行の背景を探る、という課題が残されます。これは非常に難しい問題です。今日いわれているところでは、法華経信仰の立場に「帰正」を求める賢治と、在俗の篤信者として浄土真宗に拠る立場の政次郎とに衝突があったとされますが、実態はどうだったのでしょうか。日本仏教の源流をたどるものであった関西旅行は、両者の関係改善に何か役立つところはあったのでしょうか。

■京都を訪れた大正10年が、賢治の創作の大きなポイントに

ところで、関西旅行中に宮沢親子が訪ねた中外地報社の社主が真溪涙骨で、政次郎が信仰していた浄土真宗における新仏教運動の中心となった人でした。ジャーナリストでもあり、暁鳥敏の醜聞について「中外地報」で取り上げたこともありました。

暁鳥敏は宗教家で、宮沢政次郎とも親交がありました。「中外地報」の醜聞記事では、浄土真宗の本山が認める正統派の教義に反することを行う異

安人だと書き立てられ、大変な問題になりましたが、それが政次郎との親交に影響を及ぼしたりはしなかったようです。

敏は自身の体験を告白することでそこに真実を見出していくふるまいをする人で、涙骨はそうした敏に関心を持っていました。涙骨は醜聞記事を書く一方で敏に懇切丁寧な手紙を送っており、敏も後年、涙骨の記事は自分にとって大変ありがたい機会になったと述べています。この2人の間にも不思議なつながりがあったことが推測されます。

この敏が知人を介して知った島田清次郎を、1917（大正6年）、涙骨の中外地報社に紹介し、職を持たせました。しかし清次郎はあっという間に中外地報社を辞めて上京。小説『地上』がベストセラーになり、一躍、時の人となります。この、清次郎についてふれた東京滞在中の賢治の手紙が残されています。「(中略)うまく行けば島田清次郎氏のように七万円位忽ちもうかる、天才の名はある。どうです。私がどんな顔をしてこの中で原稿を書いたり綴ちたりしてあるとお思ひですか。(後略)」清次郎の『地上』を、賢治はどのようにとらえていたか。ベストセラーにはなったものの、これを本物の文学だとは評価しなかったのではないかと、私は考えています。作家の中にはベストセラー作家とロングセラー作家があり、一時は大変に売れたものの今日ど

の出版社からも作品が出ていない清次郎は前者、一方、死後も繰り返し作品集や全集が出され多くの読者に愛されている賢治は後者と考えられます。政次郎と関西を旅行した1921（大正10）年の秋、妹トシが病に倒れたとの知らせを受け、賢治は故郷の花巻に帰ります。その時、手にしていた革トランクにはいっぱい作品原稿が詰め込まれていました。その中には、「注文の多い料理店」の原稿もあったと推測されます。

このように、宮沢賢治の創作について考える時、1921（大正10）年は大きなポイントになるのではないかと思います。その中に政次郎と日本仏教の源流をたどった関西旅行があり、また京都がつなぐ涙骨や敏、清次郎といった人物との関わりがありました。



講師：栗原 敦
(実践女子大学 名誉教授)



▲「京あるき」の取組みや京都市の現状について、京都市職員の黒沢氏・藤井氏が紹介。



▲「京あるき in 東京 2019」と提携していた本講座には、学外からも多くの方が来場されました。

参加者アンケートから（抜粋）

- 作家と京都が有機的に結びついていて、とても良い企画だと思いました。立派な資料もいただき、来たかがありました。(女性・50代・学外)
- 地図を使った内容がとても楽しくて良かったです。久しぶりに本を読んできました。(女性・50代・本学卒業生)
- 宮沢賢治と京都との関連について初めて知ることができ、とても興味深い時間でした。(男性・50代・学外)
- 都市空間と梶井文学、今まで考えたことがなかったため新しい視点を得たような気分が非常に面白かったです。(女性・20代・学外)